ゼミ論文
『観光地としての日本植民地 – 日本らしさと現地らしさ』

2007 年 2 月
日本大学国際関係学部国際交流学科 3 年

内藤恵

I. 章立て

はじめに

１章　旅行者たちの目的
１．視察
２．修学旅行
３．博覧会

２章　観光名所と宿泊施設
１．朝鮮の金剛山
２．台湾の北投温泉
３．山岳風景地帯と櫻（桜）
４．台湾における宿泊施設

３章　広報活動
１．観光映画製作
２．鮮満案内所
３．観光戦略のための性

おわりに

II. 要旨

庶民にとって海外や観光が日常的でなかった戦前において、観光の意味は現在のように「異文化体験」を目的とするものと大きく違っているはずである。戦前、日本の植民地だった台湾、朝鮮などに「観光」で行く日本人たちは何を目的として出かけていったのか。また、総督府はどういう意識を持って現地の「観光業」をどのように発展させていったのだろうか。　すなわち「日本との違い」を特長にした観光だったのか、それとも「日本化した植民地」を売りに観光客を迎えていたのだろうか。　つまり日本風の旅館が作られたり、日本食が出されていたり

したのか。それとも　観光分野に限るなら、「現地」の風俗、文化の継続が重んじられてきたのだろうか。『植民地の日本化』ということを一大目標にしていた植民地において、「観光」は日本と現地の交流を促進したのかどうかを検討する。

日本は植民地の土地開発計画を三種類に分けて支配していたように思われる。

まず、ヨーロッパ風都市計画である。これは台湾、朝鮮両者に言えることだが、総督府など政治機能を持つ建物が集中していた中心地は、ヨーロッパ風の様式を誇示した造りで、支配層日本人の居住地区ともなっており、現地の人々が訪れることはあまりなかったようだ。　ヨーロッパ風空間を作り出すことで、現地の人びとのみならず、全世界に日本がヨーロッパの先進国と肩を並べることができるとアピールし、日本人の支配の壮大さや権力などを示していたのだろう。　植民地をテーマにした博覧会では、「ヨーロッパ風」を売りにして観光客を誘致した。

次に、日本風土地開発計画である。主に温泉地や一般日本人の集落に、日本風建築が多く見られる。植民地支配を進めるにあたり多くの日本人が現地に移民入植した。　日本から離れた異国の地にいながら、望郷の念から植民地自体に日本を求め、日本風の旅館、温泉を作り、また山岳地帯に桜を植えたりして、植民地を日本の風景に近づけたりした。　こうして開発された土地は、やがて日本人観光客を集めるようになる。　すなわち植民地の中に「日本風空間」を作り、それを日本人対象の観光スポットとしたのだ。

最後に、現地風土地利用である。そこは、開発というより、現地のままである。こういうところは、特に日本人観光客にとって遊興の地になった。　具体的には、こうしたところに暮らす女性の「性」が観光政策の対象として搾取されていたのだ。　同化を行なわずに現地風のまま残した土地は、日本人の生活から排除され、差別の対象とされてきた。しかしそのように差別をしていた一方で、植民地の文化、つまり、自分たちより劣等だと考える文化を、エキゾチシズムなものとみて、楽しんだのだ。

戦前　日本の植民地に旅行した日本人の中には、植民地の人びととの交流や、文化相互理解をはかった人びとも少なからずいたのは事実だ。しかし戦前の観光には、１章の「旅行の目的」と　３章の「広報活動」のところで述べたように、政府が植民地政策をより効果的に行っていくために、日本人の間に好印象を植えつけ　ビジネスマンには植民地への投資を促そうとする宣伝狙いが　なによりもあったようだ。また植民地への修学旅行を実施したのは、師範学校が多かった。これは将来教壇にたつ者に、帝国主義の正しいあり方を示そうとしたものだ。こうした「公的視察」において現地人との会談は上流階級の人ばかりであった。　日本風旅館には　もっぱら日本からの観光客が滞在するばかりで、現地人が利用できなかった。　このように、当時の植民地観光は、交流とはいえず、日本人側の支配者としての差別的意識を強める手段に利用されていたように思える。